

---

# あしたおしまい

独マサ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あしたおしまい

### 【Nコード】

N3528D

### 【作者名】

独マサ

### 【あらすじ】

今月も今日でおしまい。とある組織のいつもの日常風景。

気づいたときには、雨は上がっていた。さっきまでの土砂降りがうそのように晴れていた。一点の疑いもない純粹で透きとおったオレンジが空を覆っている。夕焼けが目にしみて、僕は目を細めた。ヒュールリー、ヒュールリラー。

間の抜けた笛の音が鳴り響く。さあ、今日の夕礼がはじまる。

「ええっと。特に連絡はないですが、5月の数字が達成しなかった人は、各自、原因を考えるように」

部長の厚い芯のある声。

ゴー、サワサワサワ。風が吹き木々がゆれる。

ここは人里はなれた山奥だ。

「では、今日もよろしく」

部長が言い終わると、隣にいた、最近メタボリック症候群と言われ、真剣にダイエットを考えている、ろくろ首が僕に話しかけてくる。

「おい！ 岩手はどうだったんだ？」

「そうだね。雪女の肌が透けるように白くて。興奮したな。」

そう答えると、「くそー、それは手を出しちゃったことでOK牧場？」

いつもの親父ギャグが飛び出す。僕は昨日まで岩手に出張で、今朝方、太陽が上がる前に帰ってきたばかりだった。

「おいおい！ 浮気かい？ 左手の薬指のわっかが泣いてるぜ」

割り込んできたのは、相川翔ばりの高音の声の、のっぺらぼうだ。「俺だつて悪いとは思ってるんだぜ。けどさ、山奥で一人ぼっちでいる雪女が妙にそこはかなくてさ……つい」

申し訳ないような振りをしながらも、僕は内心勝ち誇っていた。

わーおー！！ ろくろ首とのっぺらぼうの声が重なる。

「それよりさ、あした締め日だぜ」話を変えようと話題を振る。

「ああ、なんかもう飽き飽きしてきたな」

「だよなー。なんで俺たちが人間の幽霊を、銀河鉄道で送り出さなきゃいけない？」

「文句言ったって。おとうの稼ぎがないと、ちびを育てられんぜ」  
「そうそう。俺たち妖怪は宇宙人がいないとやっていけないんだから」

「でもよ。最近の機械は使い方がよくわからなくてコマツチングよ」

「ああ、そうだ。ブラジルでは大変らしいぞ」

「なにがだ？」

「最近の幽霊の数が増えすぎて、ノルマがひどいらしい」

「どこも同じかあ……」

「だいたい宇宙人の言う事はあてにならんよ。幽霊の数が増えてくと、同調し、小ビツグバンが起るとか、麒麟の首は進化の過程で伸びたというのは嘘で、われわれの実験の結果だとか、人間の小指に特殊加工の赤い糸をつけるゲームだとか。ホントかウソかわからんぜ？」

「ああ、そういえば、あのやたら腰の低い宇宙人おもしろかったな。ネクスト、フジミのジッケンシマス。とか片言だったな」

「そうそう、はつきりしゃべってもらえます？　って言ったら」

「自分、不器用ですからって」

「ぷはっー。ははっはは。三人の笑い声が重なる。

「そこだけはつきり発音するんだよなー」

「変わった宇宙人もいるんだと思ったよ」

「ろくろ首と、のっぺらぼうと、ぼくとか集まるといつも会話が弾む。明日で今月の締めが終わるけど、まだ当分はこんな感じだろうな。漠然と思った。

でも。

浮気がばれたら、嫁からあしたおしまいでおしまいね。

そう、言れるかも知れないけれど。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3528d/>

---

あしたおしまい

2011年1月27日00時07分発行